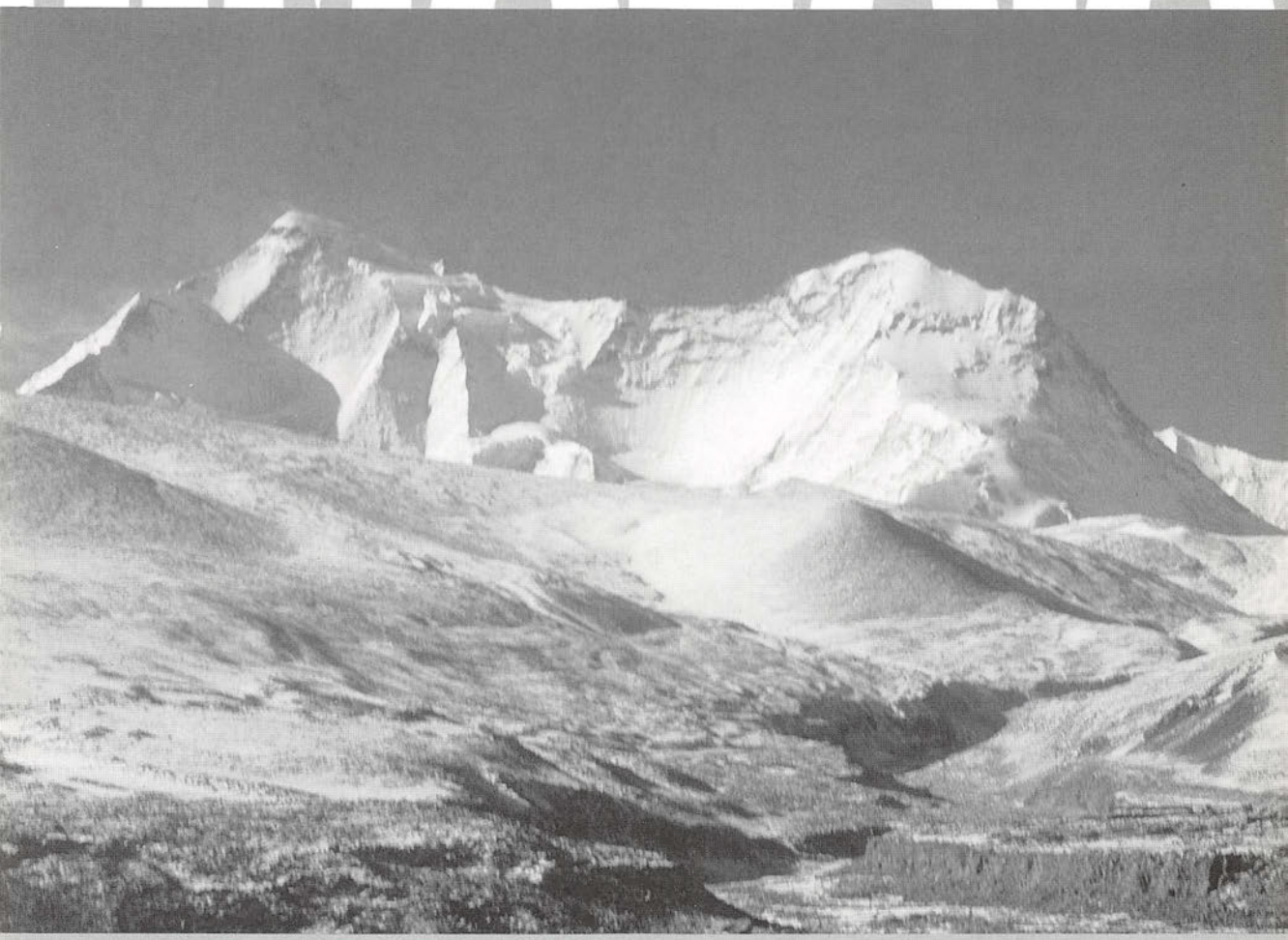
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成9年12月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.313



1997 DECEMBER

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1998年ＨＡＪ登山隊員募集

ニンチン・カンサ（7,206ｍ）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に３隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

ＨＡＪの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1．期　　間:1998年７月20日～８月25日(37日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:80万円
4．〆 切 り:定員になり次第
5．申し込み:ＨＡＪ事務局まで

海子山（5,000ｍ級）

四川省西部、理塘の南にある稲城県の名所、海子山にて5,000ｍ峰の登山とトレッキングを楽しみます。先月号で紹介したように、古寺と湖沼の多い知られざる地域です。隊長は酒井國光さんの予定です。

記

1．期　　間:1998年８月１日～21日(21日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:60万円
4．〆 切 り:定員になり次第

未踏峰（カバン 6,717ｍ）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000ｍ級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000ｍ級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1．期　　間:1998年９月18日～11月１日(45日間)
2．募集人員:６名程度
3．負 担 金:95万円

表紙写真

クーラ・カンリ北面のベース・キャンプ地は、谷沿いにあり、春の時期は毎日東西からの風に晒らされていたが、今春は特に東の強風に悩まされた。ＢＣから眼前にはいつもカルジャン中央峰（左・7,018ｍ）と北峰（右・6,824ｍ）が微笑んでおり、気持ちを慰めてくれた。央に未踏峰。

（記：山森　欣一）

ヒマラヤ No.313

1．ハインリヒ・ハラーに意外な顔が!!
5．パミールの名峰　氷山の父に登る　ＨＡＪ女性隊
14．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・ヒマラヤから・Books〉
17．バルトロ氷河から三山登頂報告　群馬県山岳連盟隊
23．日本ヒマラヤ協会創立30周年記念行事案内
24．寸感・事務局日誌

アイガー北壁初登攀者
チベットの七年の著者

ハインリヒ・ハラーに意外な顔が!!

ドイツの登山家ハインリヒ・ハラーは、ヨーロッパ・アルプスの魔の山、アイガー北壁を1938年に初登攀し、その後ナンガ・パルバットの登山後、第二次世界大戦の勃発によって、現地でイギリスの捕虜になり、収容所を脱走、ラサに入り7年間を過ごし、「チベットの七年」を出版し世界中で大ベストセラーになったことで知られる登山界の不朽のスターである。

ドイツの雑誌「Ｓｔｅｒｎ」が、実はハラーは1933年に自発的にナチスのＳＡ(Sturmabtellung)に入隊し、５年後にはＳＳ(Schutzataffel)に参加して下士官になったこと、そして38年には、自分と花嫁となる人が正真正銘のアーリア人であることの証拠を提出し、親衛隊のリーダーのハラーに結婚の許可を与えてくれるよう頼んだことなどを暴露した。

これに対してハラーは、声明を発表して、自分は38年の限られた期間、スイス・アルプスのアイガー北壁の４人の登山隊の一人として、確かにＳＳに加わったし、ＳＳの運動インストラクターにもなったが、教えたことは一度もなかった。と言うのも、その後39年にはインド遠征へと行き、イギリス人に捕まり、逃亡し、やがてダライ・ラマと仕事をするようになり、52年まで祖国に戻らなかった、と言っている。そしてまた、ＳＳの制服を着たのも自分の結婚式の時、一度きりで、ヴロツウフでの36年のスポーツ・フェステバルの開催中に、ヒットラーや他の登山家達と儀式上の集合写真におさまったことがあると言う。

突然とも思えるこのような事が騒がれている背景には、ハラーの「チベットの七年」がアメリカで映画化されたことにあるようだ。「SEVEN YEARS IN TIBET」と題するこの映画は、スーパースター、ブラッド・ピットがハラー役で出演し、若きダライ・ラマとの魂の交流を描いたものである。

10月12日の朝日新聞は、[「チベット」「ダライ・ラマ」米で相次ぎ上映] と題して、「チベットの七年」は、第二次大戦中にインドからチベットに逃亡したナチ党員がダライ・ラマに出会って感化されていく物語だ。人気俳優のブラッド・ピット氏が主演している。中国軍によるチベット進攻時の暴行なども描かれており、中国のチベット政策を批判的に描いた。と紹介し10日に封切りとなり、それを機会に、人権団体「チベット国際キャンペーン」が全米各地でキャンペーンを始めた、と報道している。

一方、中国で発行されている「北京周報」の第40号(10月７日付け)は、[ダライの「先生」だったハレールはナチスの一味] と題する李建華の記事を掲載し、李はその中で５月28日に発行された前記シュテルンの記事を詳細に紹介しているが、[世界の人々を半世紀にもわたって騙してきたハーレルのような人の言葉を信じることができるか、人々は冷静に考えるべきではないか。ハーレルがまっかな嘘をねつ造して自分の旧悪を隠してきたことがわかり、人々はどうして彼がチベットのことを客観的に描き、それを公正的に評価することができると信じることができようか。このナチスの「昔の忠実な信徒」がナチスが敗戦した翌年の1946年にチベットに逃げ、ダライの「先生」になったのだから、当時11歳だったダライにどんな影響を与えたかを人々は問わざるを得ない。] などと述べ、[ハリウッドの芸術はナチス分子を讃歌すべきであるとでもいうのだろうか。] と結んでいる。

また、10月23日付け読売新聞は、香港からのレポートとして [ダライ・ラマ映画の公開可否] と題してダライ・ラマをテーマにした米映画の公開の可否をめぐり、香港で波紋が広がっていることを伝えている。

1912年７月６日生まれのハラーは、今年85歳、事の是非は別にして映画は感動的である。日本では年末に上映される予定。

(文責：山森　欣一)

ＨＡＪ女性登山隊

パミールの名峰

氷山の父に登る

―― ムスターグ・アタ1997年夏の記録 ――

はじめに

このムスターグ・アタ女性登山隊'97の計画は、'94のＨＡＪ日中友好女性登山隊（隊長・寺沢玲子、隊員・沢田幸子、市川春代、辻野治子）が青海省の玉珠峰（6,179ｍ）の姉妹峰である玉虚峰（5,933ｍ）に登頂した際、その頂から遥かチベットの方向にそびえているグラタンドン峰（6,621ｍ）を眺めた時から始まった。

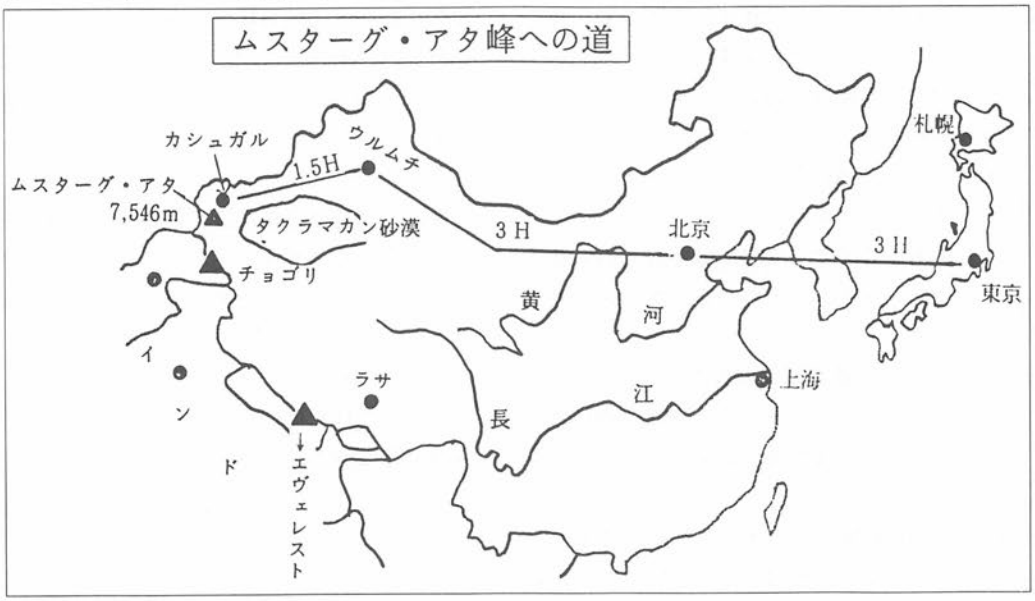
玉虚峰の遠征を終えてまもなく、辻野治子が中心になり“北海道の女性で海外遠征をしよう”と各山岳会に所属している女性に呼びかけ、１年間の準備期間を経て、'96年４月に女性の“同人・ラリーグラス”を結成したのである。いろいろな資料を調べ、ムスターグ・アタを同人・ラリーグラスの最初の遠征の山に決めたのは、ルート工作、荷上げを自分達の力でできると思ったからである。

'93年から４回にわたり、ムスターグ・アタに遠征している日本ヒマラヤ協会に派遣母体を依頼したところ、快く引き受けていただき日本ヒマラヤ協会女性登山隊として遠征することになったのである。

遠征真近になると、隊長を引き受けたことの重みをひしひしと感じた。過去のＨＡＪ隊の全員登頂などの記録にまどわされないように、安全に、私達の登り方をしよう、そして、全員が無事に帰国することを自分自身へ課した。

登山活動の前半は、天気に恵まれず３日間の予備日を使いきっての登頂であった。群青色の空のもと、無風状態で全てのものが味方してくれた８月16日、４名が7,546ｍの頂に立たせてもらった。登頂できなかった隊員も含めて「氷山の父」が、私達を迎え入れてくれたのである。

ムスターグ・アタの登頂に成功すれば、女性隊として国内初だということは計画の段階で聞いていたが、意識したことはない。また、国内の女性隊として、シェルパ、ハイポーターなしの登頂は今回がはじめてであることもカシュガルで合流し



た日本ヒマラヤ協会の山森氏から知らされた。

ただ、自分達の力でルートを拓き、荷上げし、7,546mの頂に立つことができたことは、それぞれの隊員のなかに何かの形として残っただろうと思う。

個人的には、このムスターグ・アタを含めＨＡＪの女性登山隊６隊の内４隊に参加したことになるが、６隊とも確実に引き継がれてきているのを感ずる。そして、何年も経つというのに、人のつながりは変わらずにいる。このつながりを大切に、この遠征で経験したことを次へのステップにしたいと思っている。

最後に、多くの方々のご協力、ご支援に深く感謝致します。また、同時期に登山活動をしていた“スキーＤＥサミット隊（隊長・富岡一郎以下７名）のご協力に感謝するとともに、ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。

（記：市川　春代）

中国領パミールへ

７月16日　成田－北京

いよいよ出発である。15時20分成田空港を離陸し、18時30分北京空港に着いた。ＣＭＡの趙建軍氏の出迎えを受ける。大きなビルが立ち並ぶ北京は湿度が高く気温も連日36℃という。少々ウンザリする。21時30分北京前門飯店に着き遅い夕食となる。

７月17日　北京－ウルムチ

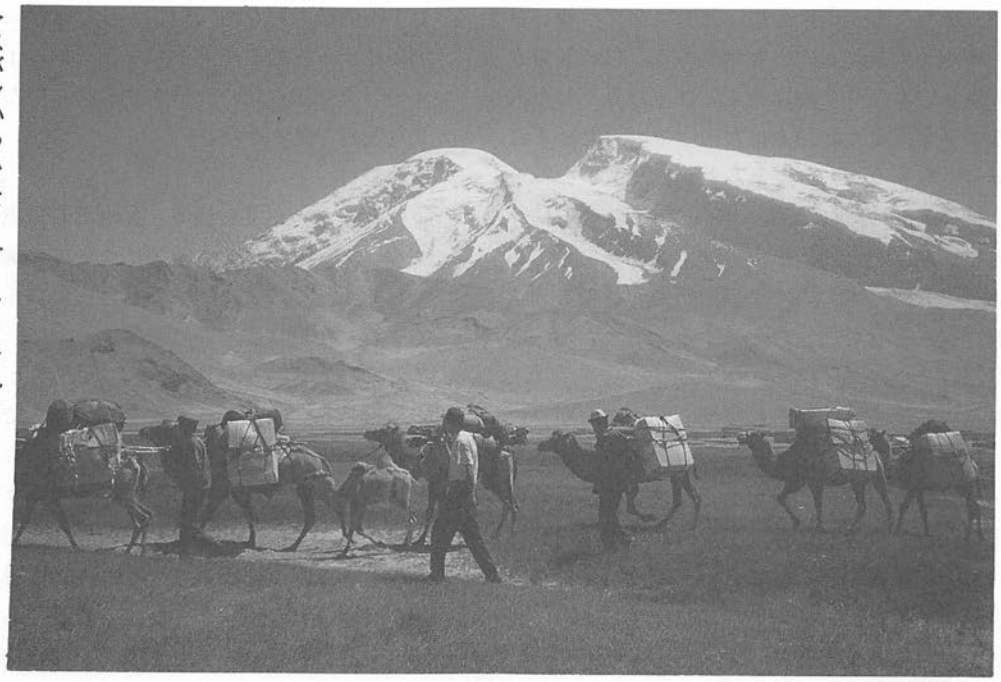
ＣＭＡの５人と北京のホテルを出て街の繁華街にある台湾料理のバイキングを食べる。ＣＭＡの人達の食欲は大へんなもので少食？の私達は、びっくりしてしまった。15時10分北京を出発し、18時30分ウルムチ空港に到着。ウルムチも夜の７時で35度はあるが、北京と違いカラリとした暑さである。道路の幅も広く街路樹もありやはり都市から地方に来たと云う感じである。ウルムチ空港で連絡官（地里夏提（デリシャート））と通訳（牙生買買提（ヤースンメイメイト））に逢う。特に連絡官は、まつ毛が長い22才のハンサムな青年でまつ毛さんとあだ名をつけた。

７月18日　ウルムチ－カシュガル

ウルムチからカシュガル迄の飛行機が夕方の便なので午前中は、日本へ出す手紙を書き午後からは街に行きバザールを見学する。18時40分カシュガル行きの飛行機に乗ると機内で扇子を渡され、おみやげかと思いつつしばらく座席に座っていると体中汗が出て来て、やっとこれがクーラ代わりの扇子である事が解った。20時15分カシュガル空港に到着。夜の10時を過ぎても明るいのに驚いた。

７月19日　カシュガル滞在

午前中、カシュガル登山協会の倉庫で日本から



▶スバシからムスターグ・アタを見る

届いていた隊荷や、ヒマラヤ協会のデポ品の整理、食糧の買い出しやらで忙がしい１日であった。炎天下の中での作業の為か通訳の牙生が頭が痛いと云う。竹内さんも朝方から腹痛、発熱でホテルで寝ている。何処へ行っても暑い。登山期間中、喉をうるおうとスイカ23個、メロン20個を多量に買い求めた。

７月20日　喀什－ゲズ渓谷

11時30分トラックに荷物を積み込み喀什登山協会を出発。今日は高所順応の為、ゲズ渓谷（2,300m）でテント泊りとなる。有名なカラコルムハイウェイを通る道路の両側には、ホプラが立ち並びこのまま、パキスタンの国境迄行きたい気持ちになる。しかしこの道もだんだん悪路になり、連絡官が川が増水になるので早い時間の出発を促していたのが解る。14時45分県境の検問所であるゲズ公安検査所に着く。15時ゲズでテント場になりそうな所を見つけテントを張り、夜は連絡官、通訳も交えてビールを飲みおおいに盛り上がる。夜には風雨となり天気が悪くなる。

７月21日　ゲズ－カラクリ湖

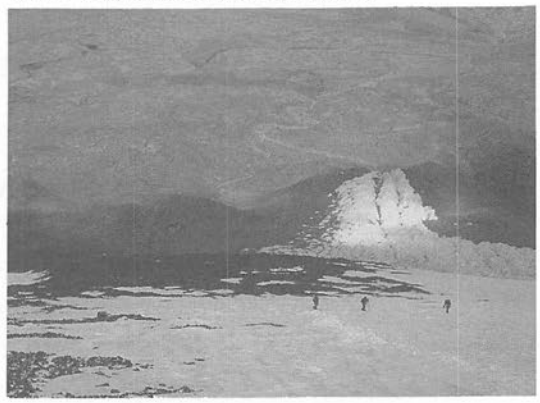
９時20分ゲズ渓谷を後にカラクリ湖へと向う。途中、昨夜の雨で道路の状態が更に悪くなり他のトラックが動けなくなっているので、私達の乗って来たマイクロバスも同じ様になったら大変と、車から降りて歩く事にした。途中コングール、コングール・チュビェの山々が見える。11時30分大きな美しいカラクリ湖に着く。どっしりとした大きなアタが見えたが頂上は雲の中であった。ここでコックを雇うつもりであったが、コックの料金が１日150元と非常に高く、何度も交渉する私達を見て、連絡官と通訳が自分達でコックをしてもよいと申し出て来たので１日80元で連絡官と通訳を兼コックとして雇うことにする。

７月22日　カラクリ湖－スバシ

カラクリ湖を11時30分に出発、30分でスバシに着く。昨日のアタの頂上は雲の中であったが、今日スバシから見るアタは大きく山の全容を見る事が出来た。トラックから荷物をおろし、お世話になった運転手さんとも、ここでお別れ、早速テント設営をする。

７月23日　スバシ滞在

▼Ｃ１上5,400ｍ付近の雪線を行く



10時過ぎ裏山へ高所順応の為4,200ｍ迄登る。途中高山植物がいろいろ咲いており私達の目を楽しませてくれた。

７月24日　スバシ滞在

休養日の夕方より堰代腹痛の為テントで休んでいる。他はキルギス人の部落を訪れる。

７月25日　スバシ－ＢＣ－スバシ

スバシを９時20分出発しＢＣ迄の往復である。連絡官とスバシの部落に住んでいる青年でマイマイティさんが同行してくれた。途中スキーＤＥサミット隊と一緒にラクダに乗ってＢＣへ行くのに出逢い挨拶をかわす。私達は月の砂漠の歌で見送る。14時ＢＣに着き4,350ｍの高度に慣れる為に食事をしたり、テント地をさがしながらの散策をし１時間後スバシへ向い、下りは来た時とは違う別のルートを通りチョトマック部落の子供達やパオの写真を撮り18時30分スバシに着いた。

７月26日　スバシ滞在

休養日

休養日といえども装備、食料等の再点検、ガモフバック、酸素ボンベ使用についての講習会と大忙しの１日であった。いつもは夜になると風が出て来るが今日は穏やかである。

７月27日　スバシ－ＢＣ

今日はＢＣ入りでラクダを13頭頼んでおいたが、10頭しか来ておらず、後の３頭は後から来ると云う。通訳と連絡官が残りの３頭のラクダと一緒に来る事になり、12時30分私達は先に出発した。

ＢＣ迄の高度には二度目であり高度障害には問題がなかったが通訳が頭痛する程度であった。16時30分ＢＣに着き、テント設営、荷物の整理をす

るが夕方の５時になっても暑く皆、少々バテ気味である。ＢＣには北京大隊、イタリア隊、スキーＤＥサミット隊のテントが張られていた。

７月28日　ＢＣ－Ｃ１－ＢＣ

ＢＣを９時45分に出発、13時Ｃ１予定地の5,100ｍに着く。Ｃ１迄は雪がなく軽登山靴で登る。ＢＣから真正面に見えるガラ場を尾根に向けて斜気味に上がる。傾斜が適度で歩き易い。

７月29日　ＢＣ－Ｃ１－ＢＣ

北京大隊が登頂し、今日は撤収との事、どうりで昨夜は朝方迄盛り上がってこちらの方は少々寝不足である。今日は、ロバがＣ１まで荷上予定の為朝８時過ぎから人の声、ロバの鳴き声でにぎやかである。辻野、狩野が先発隊としてＢＣを出発したのは９時30分であった。Ｃ１にテント２張りを張って15時45分ＢＣに着く。堰代53才の誕生日を皆に祝ってもらう。

７月30日　ＢＣ

休養日

ＢＣで初めて零度になりとても寒い朝となる。皆、洗濯をしたり、髪を洗ったりそれぞれが思い思いに過ごす。夕食には日本米（魚沼産）で作った巻き寿し、いなりが大好評であった。

７月31日　ＢＣ停滞

昨日に続き今日も寒い１日となる。９時頃から霰が雪となり、ＢＣにも雪がうっすらと積もった。今日はＢＣからＣ１迄上がる予定であったが、風も強くなって来た為停滞となる。スキーＤＥサミット隊もＣ１より全員降りて来る。辻野さんがテントでお茶を立ててくれ外の寒さも忘れ茶会の席となる。夕方より天気も回復し明日はＣ１に出発出来そうである。

８月１日　ＢＣ－Ｃ１

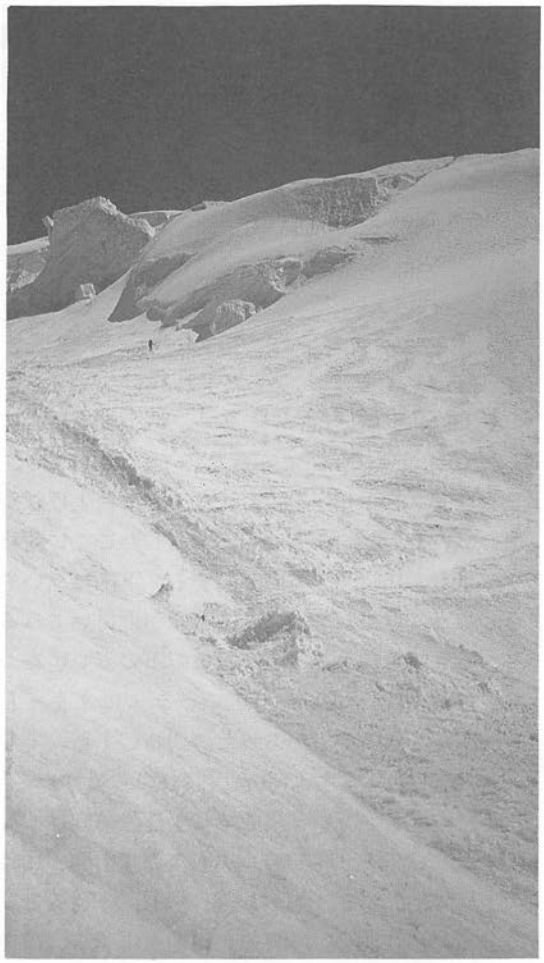
夜中、みぞれが強風と共にテントを叩く音で何度か目を覚ます。朝起きて見るとガスで視界が悪かったが、昼過ぎよりひどかったガスも上り15時Ｃ１に向けて出発した。囲りの山々にも雪がうっすらと雪化粧して美しい。17時50分Ｃ１に着く。

（記：堰代　まさ子）

正念場のＣ２へ

８月２日　Ｃ１～5,550ｍ（晴れ）

▼Ｃ１～Ｃ２間のデブリ



5,000ｍでの初めての宿泊だが、皆順調に朝を迎える。夜は結構冷え、外張の内側に置いておいたポリタンクが凍っており、予想以上に夜半は気温が下がるようだ。

７時30分に起床したのだが、テルモスの紅茶を作っている時に、コッフェルが倒れ、中の熱湯が辻野の足にかかる。そのやけどの応急処置のために、出発が遅れ、11時になる。辻野、竹内、沢田がＣ２へのルート確認、ルート工作のため、先行する。30分程遅れ、狩野、市川、堰代がＣ２へ荷物を荷上げのため出発する。5,300ｍ位が雪線であり、テント跡もありここが例年のＣ１のようだ。

上部に見えるアイスフォールがいやらしそうに見え、それを避けるようにルートをとり、コンテをしながら、雪面を登る。イタリアのスキー隊も我々の後ろを歩いてくる。彼等もきちんとコンテをしている。スキーをはいてもこうやってコンテ

▼Ｃ１～Ｃ２間を行く　　（芝工大隊提供）

をしていくのは、さすが、アルプスの国と感心する。5,550ｍで傾斜がでてきたので、念のため、ＰＰロープを１ピッチ張る。その間に荷上げ隊が追いついてきた。荷上げ隊と合流したここに荷物をデポし、16時30分下山開始する。下山は、いやらしそうに見えたアイスフォールが近付いてみると、そうでもなかったので、その下のガレ場をつないでおりた。5,500ｍの広いテラスにスキーＤＥサミット隊のＣ１があった。18時Ｃ１着。

８月３日　Ｃ１～5,750ｍ（晴れのち曇り）

今日も同じメンバー構成でＣ１建設に向けて行動する。Ｃ１を９時40分ルート工作隊出発、10時荷上げ隊出発する。今日は昨日の下山ルートをとって登る。12時30分、昨日のデポ地点に着き、荷物を回収する。ここで、堰代が体調が良くないので、5,500ｍの広いテラスのスキーＤＥサミット隊のテントの所で待っていることになる。昨日のフィックス地点からさらに３ピッチ、ＰＰロープを張る。コングールの山々が近くに見え、カラクリ湖も青く見える。とても美しい。16時30分5,750ｍのテラスに着く。17時30分ここに荷物をデポし、下山を開始する。堰代と合流し、19時Ｃ１着。

今日は、狩野の誕生日。豪華にＢＣでお祝いしたかったのだが、残念だった。

８月４日　Ｃ１～5,300ｍ～ＢＣ（雪のち曇り）

今日こそ、Ｃ２を建設しなければと出発するがガスと雪で視界が悪い。９時40分Ｃ１を出発。10時40分雪線に着く。ますます視界が悪く、風も強い。今日のＣ２建設は無理と判断し、ＢＣに降り体制を建て直すこととする。18時頃より晴れてくる。ミーティングをもち、今後の相談をする。芝浦工大隊がＢＣ入りしてくる。

夕食は、ちらし寿司とのりまき。隊員は皆感動していた。スキーＤＥサミット隊にも差し入れをする。今回の食料係の狩野はプロの調理師であり、限られた材料を使い、まことにおいしい料理を提供してくれた。素人の我々には、とてもまねできない腕前であった。また、彼女は高所順応もうまくいき、荷上げに大きな力を発揮してくれた。まさに「登れるコック」であった。

８月５日　ＢＣ～Ｃ１（晴れ）

朝、ロバの鳴き声で起こされる。芝浦工大がＣ１荷上げに使うロバたちだ。夕方の出発に備え、各自、洗濯をしたり、ゴミ焼きをしたりと自由に過ごす。16時Ｃ１へ向け、出発する。18時30分Ｃ１に着く。

８月６日　Ｃ１～Ｃ２～ＢＣ（晴れ）

今日こそは、なんとしてもＣ２を作らなくてはと気合いを入れて８時にＣ１を出発する。12時30分に８月３日の5,750ｍのデポ地点に着く。Ｃ１からＣ３用テントも持ってきたので、ここでデポ品を回収すると、皆かなりの荷物になった。今日は全員で荷上げだ。正面の尾根を越すと、幅５ｍ程の平らな尾根状になる。そして、沢に少し下り、亀裂の入った、今にもくずれそうなアイスフォールの下を通過する。その下にはデブリもあり、非常に不安を覚えた。その後、スキーＤＥサミット隊がフィックスしたロープを使わせていただいて、平らな斜面に出た。ここから、なだらかな雪の斜面をひたすら登る。高度計を見ても全然高度をかせいでいない。17時過ぎ、ようやく、スカイラインの丘の上に上がる。先頭を行く狩野は、正面の大きな丘の下にあると思われる平地を目指す。17時30分、ようやく、6,000ｍのＣ２に着く。スキーＤＥサミット隊のテントもすでに張ってあった。急いでテントを設営し、18時30分下山を開始する。歩き始めると、竹内の歩行のバランスがおかしい。あわてて、狩野と辻野のコンテのザイルの真ん中に入ってもらう。21時40分、Ｃ１に着く。もう薄暗いが、もうひと頑張りしてＢＣに降りる。22時30分ＢＣ着。全員くたくただった。

８月７日　ＢＣ（晴れ）

昨日、遅くＢＣにおりてきたので、皆、ゆっく

りと起床。10時30分に遅い朝食をとる。その後、ミーティングで今後のことを話合う。いろいろな意見がでたが、一次隊（A隊）が辻野と狩野、二次隊（B隊）が市川と沢田と竹内。堰代はBCキーパー、C3建設まで一次隊に市川が加わり、荷上げの補強を図るということになる。

連絡官のデリシャートが微熱があり、風邪のようなので、薬を飲んでもらう。我々をいろいろとサポートしてくれ、その疲れがでてきているのだろう。また、女性隊の連絡官というのも気をつかうのではないだろうか。

BCはテントが増え、まるで、ちょっとしたテント村だ。最盛期で10〜15隊は入っていたと思う。日本隊は我々を入れて3隊。あとはイタリア隊が多い。イタリア隊のひとりに話を聞くと2年程前にイタリアの山岳雑誌にアタが紹介され、よく知られるようになったということである。

〈A隊〉

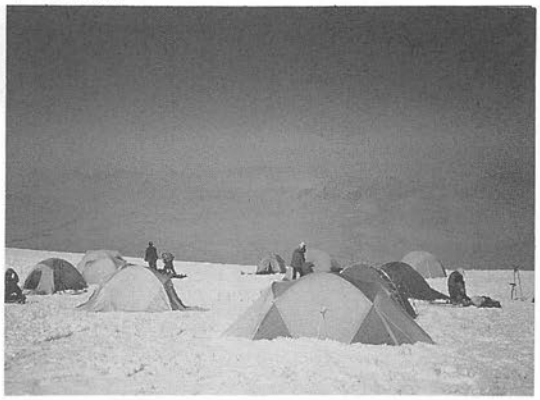
8月8日　BC〜C1（晴れ）

16時15分、市川、狩野、辻野の3人でC1を出発する。今回の目的はC3建設である。18時20分C1に着く。

8月9日　C1〜C2（晴れ）

9時15分C1を出発する。C2への残りの品を荷上げする。雪線にたくさんのテントが増えているのに驚く。ほとんどの隊はここをC1にしていたようだ。落ちそうなアイスフォールの下を歩かないですむように、迂回路を探しながら行くが、有効な迂回路は見つからなかった。途中、8月6日に、沢田が荷上げできずに途中にデポしていった荷上げ品を回収し、荷物がさらに大きくなる。19時15分にC2に到着する。

▼C2風景



8月10日　C2〜C3〜BC（晴れ）

9時30分、C2を出発する。C3建設とともにC3の荷上げも今回でほとんど終わらすということで、3人とも結構な荷物である。太陽が昇っても、西稜なので、11時位まで、日陰になっていて

▲C2にて左から沢田、竹内、辻野、市川、狩野　（芝工大提供）

▼Ｃ２にてサミット隊のハイ・ポーターと(芝工大提供)

非常に寒い。スキーＤＥサミット隊のトレースがあるため、ラッセルがたいしたことなく、助かる。ゆるやかな雪の斜面がひたすら続く。大きなクレバスが左に見える。14時の竹内パーティとの交信で、できるだけ高い所にＣ３を作って下さい、とハッパをかけられる。大きな台地を右にまわりこんでしばらく歩くと、スキーＤＥサミット隊のＣ３が見え、あそこまで行こうと思うが、一歩一歩が重く、なかなか、近づかない。17時30分、スキーＤＥサミット隊のテントの50ｍ程下の6,750ｍにようやく到達し、ここをＣ３とすることにする。テントを設営していると、スキーＤＥサミット隊の隊員の方が降りてきて、テルモスの紅茶を御馳走してくれた。18時下山を開始する。デポ旗をたてながら下る。Ｃ２で竹内パーティと挨拶し、急ぎＢＣを目指す。Ｃ１に23時に到着。疲れきっていたが、ＢＣの方が休めるので、ヘッドランプをつけてＢＣに下る。ＢＣに着いたのは、次の日の０時40分であった。

８月11日　ＢＣ（晴れ）

通訳から、連絡官と一緒に堰代がカシュガルに降りたことを聞く。通訳が堰代から預かっていた手紙を受け取る。我々のいない間に、竹内、沢田が堰代に、カシュガルに降りるよう強く勧めたようで、堰代も、家庭の事情で気になっていることもあり、降りたようだ。

竹内パーティは今日、順応のため、Ｃ２からＣ３に登りＢＣに降りてくる予定なのだが、朝から無線が通じない。20時になっても通じない。無線機が壊れているにしても、Ｃ２に降りてくれば、スキーＤＥサミット隊がＣ２に泊まっているので、いざとなれば無線機をお借りすることもできる。ということはＣ３にいるか、Ｃ２からＣ３間でなにかあったのか、と心配になってくる。

スキーＤＥサミット隊は、今日、昼過ぎに隊員４人とパキスタン人ハイポーター２人が登頂したということだ。Ｃ３から４～５時間でピークに着いたらしい。夕方、スキーＤＥサミット隊のパキスタン人ハイポーターが既にＢＣに降りてきていたので彼等に竹内パーティに会ったかどうかを、聞きにいく。彼等が降りて来るときに、彼女たちに、Ｃ３の少し下で15時頃に会ったという。いずれにしても、待つしかない。ヘッドランプをつけてＢＣに降りてくるかもしれないと、夜中も気にしていた。

８月12日　ＢＣ～Ｃ１（晴れ）

８時から無線を開けるが、竹内パーティと昨日同様に連絡がとれないでいると、芝浦工大パーティから、彼女たちがＣ１～Ｃ２の間のフィックスを降りていたと連絡が入る。元気かどうかはわからないが、ひとまず、ホッとする。夕方にスキーＤＥサミット隊がＣ２からＢＣに下りてきて、彼女たちの「Ｃ１に泊まる」という伝言を伝えてくれる。

17時30分アタックのため、辻野と狩野がＣ１へ向かう。19時45分、Ｃ１に着く。テントに竹内パーティがおり、事情を聞く。

８月13日　Ｃ１～Ｃ２（晴れ）

９時30分、辻野と狩野がＣ１を出発する。アイスフォールの下を通過し、小休止をしていると、イタリア人のスキーヤーが下りてくる。深いクレバスの正にへりでジャンプターンをし、フィックスの張ってあるかなり傾斜のある斜面をパラレルで華麗に下りてくる。狩野と二人で見とれて思わず拍手をしてしまう。我々はスキーを使わなかったが、欧米のほとんどの隊はスキーを使用していた。しかし、普段、高所で氷河やクレバスのある雪面を滑っている彼等と、日本の山しか滑ったことのない我々とでは大きな違いがあるだろう。19時45分、Ｃ２に着く。

８月14日　Ｃ２～6,500ｍ～Ｃ２（晴れ）

10時にＣ２を出発する。元気のいい狩野に先を歩いてもらう。辻野は、歩いているうちに、Ｃ２

ではたいしたことなかった咳が標高を上げるにつれ、だんだん多くなってきた。13時20分、イタリア隊のテントから上はトレースがなくなり、狩野がラッセルして行くが、辻野は少し歩いては咳き込むという感じでラッセルしている狩野に追い付けない。更に上にいくと、一歩、歩いては咳き込むようになり、前に進めなくなってきた。6,500mで、狩野には申し訳ないが、16時40分C2に下りることにする。下りは速い。17時30分、C2に着く。C2におりてくると、咳は嘘のように治まった。18時40分、市川、沢田、竹内がC2に到着する。そして、全員で相談し、狩野は二次アタックのメンバーに加わる、C3ではテントが小さいのでスキーDEサミット隊のテントをお借りする、辻野は荷下げのため、C2に残ることになる。

また、シュラフが足りないため、市川、狩野がシュラフカバーと羽毛服で皆の間に入って寝ることになった。

夜、竹内が「市川さんの顔が半分に見える、記憶が思い出せない」と言い、唇を見るとチアノーゼになっており、あわててO₂キャンドルを吸わせた。しばらく吸うと、頭がはっきりしてきたようなので、様子をみることにする。

（記：辻野　治子）

B隊の記録

8月8日　B隊　BCレスト

A隊が午後登っていく。

8月9日　BC－C1

午後C1へ、1時間半で到着。スキーDEサミット隊のABCで一人テントキーパーをしているパキスタン人のコックが、粉ミルクたっぷりのミルクティーとビスケットで迎えてくれる。彼は昨年パキスタンで94年HAJ隊でアタに登った関根幸次さんから贈られた94年HAJ隊のTシャツを着ており同じ山岳会にいる沢田と話がはずむ。それにしても山の世界は広いようでせまい。

8月10日　B隊　C1－C2

少しゆっくり目の10時出発。C1からはコンテが約束になっているが、ザイルでは重くなり軽量がなによりと、PPロープで行くことにする。沢田がトップを歩きリズムを作る。

昨日の無線でA隊は懸垂氷河の下を通らない迂回路ができていると言っていたが、わからなかったので確実な道を取る。後からBC入りしてきた外国隊が物凄いスポードで登っていく。順応っていったい何？と疑問がわくくらいだった。

4時30分C2着。過去のHAJ隊よりいつもはるかに遅く目的地に着いていたが、今回は平均時間でお互いちょっとニコニコ顔。20時頃A隊がC2上部から姿をみせる。温めておいたお茶を飲み早々にBCに下山しいく。夜中になるであろう。

ここは障害物なしの雪原。テント横にツエルトを張りトイレを作ってみたが調子良くなく、しゃがんでいればテントで隠れて判らないと、少々開き直って周りの様子をうかがい花を摘む。

8月11日　B隊　C2－C3

快晴の中C3に出発。一週間前にカシュガルに来たばかりと言うドイツ人は、あっと言う間に私たちを抜き去って行った。明日はアタックだそうだ。付いていけない世界の人たちだ。「リズムを作らなきゃ」と思いながらも喘ぎながら登る。

1時過ぎ“Hi!sisters!”とアタックをつい先ほど成功させた余裕たっぷりのスキーDEサミット隊のハイポーター二人に会う。これを機に数十分おきにスキーDEサミット隊の隊員に会い、握手をし写真をとりあったりと歩行リズムは狂いっぱなしだった。

無線が通じなくなっている。昨日、狩野から私たちの声が聞き取りにくいと指摘されてはいたが…。6,500m付近のトラバースの頃から右からの寒風が体温を奪っていく。冷えのせいかお腹が痛くなっていたが、昨日のA隊の頑張りを潰すまいと頑張る。

テントの中は風が無いだけでとても温かく感じられる。無線は通じず、BCで皆心配しているとは思ったが泊まる事にする。

新高度でのスティ、テントを打つ雪など、とても不安で寝むれない。キャンドルはもしものためにピンを引くだけの状態にしておく。

8月12日　B隊　C3－BC

寒い朝だった。30cm位の積雪でトレースはすっかり消えている。無線は相変わらず交信不能だ。だめ。すっきりしないが、天気が良くなる気配が

▼中央がピーク

出てくる。10時過ぎ沢田はチャンスと見るや一刻も早く降りることがベストと新雪をガンガンラッセルして降りはじめる。すごい主婦である。

疲労していても下りは2時間もかからずにＣ２に着く。Ｃ２のスキーＤＥサミット隊がＢＣで隊長が心配していることを伝えにくる。しかし、ここでも無線はだめだった。

ＢＣに十分に戻ることができたが、明日はまたＣ１に戻るので、残るアタックまでの体力をなるべく消耗しないようにとＣ１ステイを決め、ＡＢＣでＢＣ下山のパッキング中のサミット隊に、万が一無線がこのまま交信不能の時の為に市川隊長への伝言を頼む。

７時過ぎ、今日Ｃ１入りのＡ隊が登ってくる。副隊長は即座に無線機をチェック。壊れていることがわかった。

８月13日　Ｃ１レスト

朝、Ａ隊が出発していった。今度会うときは登頂後の彼女たちだと思うと「がんばってきてね」と大声を出していた。夕方、市川隊長と合流。心配させたことを謝る。ワンチャンスのアタックだが、また明日から頑張ろうと気を取り直す。

８月14日　Ｃ１－Ｃ２

10時出発。快晴のなか「Ａ隊も快調に行ってるだろう」と、頼みの綱の天気が好天を喜びながら進むが、また無線が通じない状態になる。４時の交信で直ぐ上のＣ２に引き返している事がわかる。

８月15日　Ｃ２－Ｃ３

今日も好天、よかった。11時に副隊長に見送られ出発。私の視力もおかしくない。今回も途中、無線は通じなかった。

トレースは何本もあり、すれ違うヨーロッパ人は華麗なスキーで降りていく。今年の冬はスキーを頑張ろうとなどと考える。しかし、Ｃ３に近づくにつれもとの静かな山に戻って行った。

意外に時間がかかり、８時着。特に沢田は辛そうだ。しかし頑張り通し、更に30分近くアルバイトを強いられるスキーＤＥサミット隊の上部テントに来た。食事を早々に済ます。食べられるだけ食べた。沢田は横になりたいようだ。

私はとにかく水をつくる。シュラフにもぐれたのは12時過ぎだった。全てを抱いて寝る。時々風がテントをたたく。

８月16日　Ｃ３－頂上－Ｃ２

６時起床。好天だ。「後は体力だけが問題」という状態にとうとうこぎつけた！朝食はビスケットとあまーいココア、紅茶。水分と砂糖をとるよう努める。今日登ってくるはずのスキーＤＥサミット隊にお礼と、借用したものを書き置きする。

８時前には出発できる状態になっていた。が、下のテントからは姿は見えない。大声で叫ぶと、誰かが出てきて手を振るので元気なようだ。９時我々の体も冷えてきた。それでもまだ出発しそうにない。また叫ぶ。

予定より１時間以上も遅れてやっとザックを背負った姿で出てくる。これから先のトレースは殆ど消えているし、山頂まで９時間位が平均時間だと計画書に記されていたので、登頂できずに引き返す事も考える。

待っている間私たちの体はすっかり冷えたのでラッセルも体がしびれて感覚が鈍くなっている。下の二人が追いついてきて代わる代わるラッセルをする。遠くカラコルムが見えはじめるころ、休みの間隔がそれぞれ違ってくる。私は過去の記録では高度計が7,200ｍを越えれば見通しがついているようなのでとにかく前進を心掛ける。大雪原の中、５本のフラッグを過ぎるまで休みも、高度計も見ないと決めリズムを大切にする。

右に岩が見える。「いける」と確信が湧いてくる。そしてとうとう目の前に岩の冠が見えた。振り返り皆に叫ぶ。15時40分、無風快晴の中、ムスターグ・アタの向こうの絶景を見る。30分後沢田が到着。四捨五入すると？十歳とは思えないお母

さんがだ。

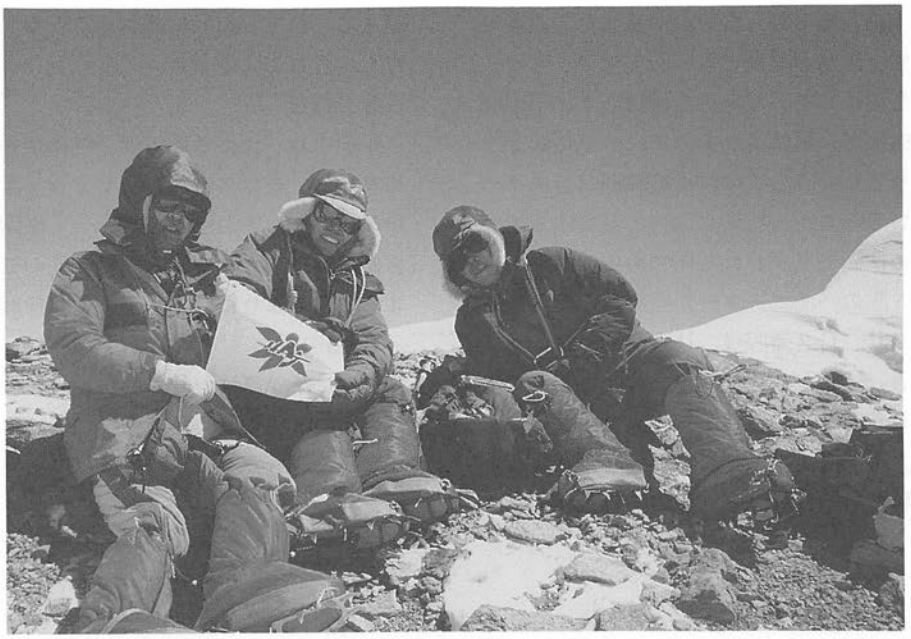
その後、隊長も来たが「狩野を待って一緒に山頂に行く」と言い手前で歩みを止めた。そしてとうとう16時30分過ぎ全員で山頂に立った。ＨＡＪの旗、ラリーグラスの今村さんが手作りで描いてくれた旗を持って記念写真。一人前のサミッター気分である。Ｃ２への無線はだめだった。

いっきに下山。Ｃ３では二次アタックに登ってきたスキーＤＥサミット隊のハイポーターが抱きしめてほめてくれた。そしてありがたい熱い甘いお茶を御馳走になる。しかしのんびりはしてられない。疲れた体に鞭打ち撤収作業。腐った雪に足を取られながらもとにかく降りる。途中、すれ違う外国人に“オメデトウ”とキスをされたり、お茶を誘われたり、山頂にいる時よりも登頂の実感が湧いてくる。

Ｃ２ではテントの外で副隊長が熱いハニーレモンを作って迎えてくれた。やっと休める。素晴らしい一日だった。お世話になった人達に感謝しながら眠る。　　（記：竹内　千恵）

登頂記

朝６時半起床。今日は、アタック日だ。テルモスの湯を作りながら朝食を軽く済ませる。ガスの火力が、弱くお湯作りに手間取る。出発の準備をしているうちにスキーＤＥサミット隊のテントから元気な掛け声が聞こえてくる。今日は、彼女たちも調子が良さそうだ。隊長が、先に出発するが私は、アイゼン調整で手間取り、遅れてしまう。アタック日なのに、出鼻をくじかれてしまう。スキーＤＥサミット隊のテント前に集まってから、まず遠く東方向に見える外国隊のテントを目指す。そこからコングールの山々を見ながら正面のスカイラインを目指し登る。そのうちコングールの山々も見えなくなり、単調な登りが続き、忍耐だけで進む。途中、竹内、市川、狩野の３人で交代しながらのラッセルになるが、私のラッセルは、お腹の調子が悪いので長くは続かない。申し訳ないと思いながら登っているうち時計を見るともう４時間以上も歩いている。隊長に標高を尋ねると、7,050ｍとの答が返って来る。その時、これから500ｍ以上登る時間、Ｃ３撤収、私の体調を考えて先に降りる旨を伝えるが、ピークまでがんばろうと励まされてまた歩きだす。青い空、白い雪面所々にある赤いルート旗、すばらしく聞こえは良いが、こればかり続くともう嫌になってしまう。そのうち右手のスカイラインに黒い岩場らしき物が見えてくる。先行している竹内が、大きな声を上げている。そのうち姿が見えなくなったが、あそこまで行けば、先の見通しが立つだろうと思いひとが



▲頂上にて（左から沢田、市川、狩野）

▼頂上とポール

▼頂きを去る

んばりする。斜面を登り終えると、そこから先は、平らな雪面になっていて、３ヶ所ある黒々とした場所の中央に竹内、沢田が立っている。そこの少し手前に隊長が、座っているのが見えた。もしかするとあそこがピークなのかと思いながら隊長の所へ行くと、彼女は、私を待っていてくれたのだ。初めての遠征参加の私の為に先を譲ってくれるのに待っていたのだ。お互い先を譲り合いながら進むうちにピークに着いてしまう。ピークは、そこだけが、ガレ場になっていて少し大きめな赤いルート旗が立っていた。その先は、スッパリ切れ落ちていて、登って来た所の雰囲気とは、だいぶ違う。眼下には氷河の流れが見え、はるか遠くには、カラコルムの山々が見える。顕著な山もいくつか見えたが、山の名前が判らないのが残念だ。お互い握手をして、記念写真をとり、石を捨い、もう一度まわりを見廻して、ピークを確認して、下山開始。Ｃ３撤収が、気に掛かるので、一気にＣ３付近まで降りてしまう。この付近の斜面は、スキーに適しているとスキー技術において左に出る者がいない私の技術でも思われる所である。スキーＤＥサミット隊のハイポーターから紅茶とお菓子を御馳走になり、Ｃ３撤収後、辻野が待つＣ２へ、21時30分着。辻野が、登れて良かったと言って出向えてくれる。私もＣ２へ戻って来て、ようやく安心する。市川隊長の『今日はいい一日だった』の言葉で私たちラリーグラス隊の一日は終えた。

（記：狩野　明美）

山に別れを告げて

８月17日

９時過ぎにゆっくり起きてＣ２の撤収をする。昨日のＣ３の荷物だけでも結構あったが、さらにテントややかん３ケ、フィックスロープなどを加えるとみんなかなりの重さになった。13時30分頃くだる。雪壁のところは竹内がダブルボッカして私の荷物を下ろしてくれたが、芝工大の細い６ミリロープでの懸垂は、空身でも怖いくらいだった。18時ころＣ１へ到着して、芝工大の若者達に西瓜をご馳走になる。

明日はロバが上がってくるので荷物をまとめるが、疲れた身体で一つ一つやることがのろいのが自分でも分かる。20時過ぎまでかかった。日没近い21時50分ころやっとＢＣへ降りた。テントの数がおびただしく増えている。他の隊の人たちも出迎えてくれて、口々に「おめでとう」と言ってくれた。登れてよかった。

８月18日

午前中ロバによる荷下げ、午後から隊荷のまとめをする。夜はスキーＤＥサミット隊と共にお互いの登頂祝いとお別れのパーティを開いた。狩野さんが料理のウデをふるって数品のご馳走を用意する。久しぶりに私もパキスタン料理を味わった。

８月19日

荷物はラクダに、私たちは歩いてスバシへ行く。迎えのバスに乗りカラクリ湖で遅めの昼食をとって、17時過ぎカシュガルに向けて出発する。22時過ぎ到着。

夕食の最中、山森さん達が到着した。やっと登山が終わって私は疲れがどっとでた…。

８月20日

朝食後、カシュガル登山協会へ行って備品の整

理をする。主要テントはラサに送り、残りはカシュガル登山協会の保管料と相殺することになった。午後は観光とバザールを散策する。

8月21日

朝、日本へ電話して驚くべきニュースを耳にした。パキスタンのスキル・ブルムでセラックの崩壊による爆風に飛ばされて、広島さんや菊田さんら6人が亡くなった……という。

午前中、エイティガール寺院その他へ行く。午後ミーティング。

8月22日～23日

カシュガルからウルムチを経て北京へ。

8月24日

北京から成田へ、エンジントラブルで夕方になった。

（記：沢田　幸子）

◎隊の名称

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ女性登山隊

◎結果

8月16日、竹内、沢田、市川、狩野の順に4名が登頂に成功した。

◎隊の構成

隊　長　市川　春代　1950年1月14日生（47歳）
副隊長　辻野　治子　1956年12月11日生（40歳）
隊　員　沢田　幸子　1940年12月1日生（56歳）
〃　堰代まさ子　1944年7月29日生（53歳）
〃　狩野　明美　1954年8月3日生（43歳）
〃　竹内　千恵　1966年5月2日生（31歳）
連絡官　地里夏提（デリシャート　22歳）
通　訳　牙生買買提（ヤースンマイマイティ）

（編注）

7,500m級の登山隊で、ガイド、ハイ・ポーターを雇用せずに登頂した女性隊としては日本で初めての隊となる。尚、沢田隊員の55歳と8ヶ月は、田部井淳子のチョー・オユーの56歳11ヶ月に次ぐ女性高齢者登頂の記録となる。

▲頂上から南東稜とはるかカラコルム方向をのぞむ

地域ニュース

《ネパール》

登山期間中も許可可能

ネパールのポスト・モンスーンの登山期間に入ってから、アマダブラム6隊、バルンツェ3隊、サガルマータ、ローツェ、マカルー、マナスルなど22隊に登山許可が発行された。韓国、ドイツ、イタリアが各3隊、フランス、アメリカ各2隊、スペイン、ニュージランド、オーストラリア、カナダ、イギリスなど全世界に許可が出された。

（情報提供：コスモ・トレック）

これでは、登山規則を遵守している登山者が馬鹿を見ることになり、ネパール政府の猛省をうながしたい。

登山規則が一部改正か？

9月29日新規則が発表された。実施についての詳細は不明。

1.マカルー、バルン方面環境保護プロジェクト

トレッキング、登山隊でマカルーＢＣ、メラピーク周辺への全ての入山者は、入山料1万ルピーを支払わなければならない。また、下記の場所以外でキャンプすることを禁止する。

◎マカルーＢＣへ入山する場合

1.Khongma 3,500m　2.Mumbuk 3,400m
3.Yangle Kharka 3,645m　4.Merea 4,100m
5.Shershong 4,600m　6,Takmaru 4,785m

◎インク＆ホング谷に入る場合

1.Chutanga 2,850m　2.Chhaterwa 4,155m
3.Tabsing Dingma 3,350m　4.Khote 3,555m
5.Thagang 4,175m　6.Khare 4,785m

2.燃料用木材使用について

樹木や灌木を切ったり、損害を与えたりすることは固く禁止する。したがって、全てのトレッキング、登山隊のエージェントとトレッカー登山隊は、ポーターを含む調理用の燃料として石油かプロパンガスを使用すること。

3.石油貯蔵所について

タシガオンではケロシンを価格1ℓ、約43ルピーで販売。サガルマータ汚染管理委員会（ＳＰＣＣ）はルクラで1ℓ、45ルピーで販売する。

4.石油コンロと毛布（ブランケット）の貸出し

10ルピー程度のレンタル料、200ルピーのデポジットでレンタル可能である。

5.パックイン、パックアウト

国立公園内では、ゴミ処理廃棄施設がないので、トレッキング、登山隊は、タシガオンと、ルクラの指定された場所でゴミを処理すること。

（情報提供：大西　保）

新首相が就任

10月4日に不審任案が可決されたロケンドラ・バハドル・チャンド氏に替り、7日新首相に国民民主党総裁のスルヤ・バハドル・タパ氏（69）が就任した。タパ氏は国王親政下で、4回も首相を務めた一方で、72年から約2年間投獄されたこともある。基本的には王室存続と反共主義、インド、アラハバード大卒、1男3女の父。

ネパール登山協会会長が急死

ネパール山岳協会（ＮＭＡ）会長のダワ・ノルブ・シェルパ氏は、10月28日午前7時（ネパール時間）急死した。氏は、24日体調を崩してトリブヴァン大学病院に入院したが、容体が急変して死去したもの。

《インド》

ストック・カンリ（6,153m）に登頂

神奈川労山30周年記念インド・ヒマラヤ登山隊（香取純隊長(45)ら10名）は、8月19日隊長以下、成田仁司(50)、大槻利行(34)、香取静子(47)、角田富美子(46)、植田米利子(38)、宮崎みち(44)、白井良岳(25)、井上洋司(53)の9名が登頂した。

リエゾン・オフィサーの同行、ビザの取得、環境保護費300US＄の徴収、無許可登山隊の横行と、トレッキング許可の意味がない、ＩＭＦのきちんとした対応が必要と隊長は報告。

（情報提供：香取　純）

《中国》

ムスターグ・アタに登頂

岩崎洋（37）がブロード・ピーク登頂のあと、パキスタンから中国に入り、林健太郎(25)と組みカシュガル登山協会から許可を取得し、ノーマルルートから9月29日に登頂した。ＢＣから10日間であった。林は7,450mでリタイア。なお、イスラマバードから旅費、登山費用含めて2人分の全ての費用が2,670ドルと、超経済登山であった。

（情報提供：岩崎　洋）

ガウリ・シャンカール断念

山野井泰史(32)と長尾妙子(41)のペアに岩田光弘(39)が加わり挑んでいた中国側からのガウリ・シャンカール(7,134m)北面は、結局ペアが北東稜6,300mに達したものの登頂を断念した。

（情報提供：長尾　妙子）

インフォメーション

都岳連・海外登山研究会(秋)のお知らせ

東京都山岳連盟主催の標記研究会が下記の通りに開催される。

記

日　時　11月29日　土曜日　9時～17時
会　場　国立オリンピック記念青少年総合センター
　　渋谷区神園町3-1　☎03-3467-7201
交　通　小田急線・参宮橋駅下車徒歩3分
参加費　3,000円
内　容　午前・1997登山報告
　　ファワラ・ラング（インド）ニンチン・カンサ（中国）ナンガ・パルバット（パキスタン）ダウラギリⅠ（ネパール）
　　午後・テーマ「雪崩」
　　ブロード・ピーク　静岡市山岳連盟
　　アンナプルナⅠ　群馬県山岳連盟
　　スキル・ブルム　神奈川ヒマラヤンクラブ
申込み　参加申込書に参加費を添えて下記まで現金書留で送付のこと（〆切11月25日）

〒渋谷区神南1-1-1岸記念体育館
日本山岳協会内　東京都山岳連盟
☎ 03(3481)2397　FAX 03(3481)2395

ヒマラヤから

ラプチェ・カン便り

タシデレ！

ラプチェ・カン山群7,100m峰偵察無事終了し、今ラサに来ています。7,100m峰はなかなか良い山で、大きな氷河をたたえ、奥にドンと鎮座したその様は、コンガ山を思い出させられる感じですらありました。

ランゴロ村の村長はまだ山森さんの事、覚えていて自分がヤクを率いてＡＢＣへ入ったのだと自慢していました。またその時の西蔵隊のププさんが私らの案内役をつとめてくれました。彼は今やチベットを代表する登山家に成長しています。

9月24日　ラサにて　林　雅樹

ニルカンタ便り

9月28日地元の理解を得て、リシ・ガンガ沿いのチャランバドゥカに慰霊碑を設置しました。フカム・シン氏や佐々木さんや松山さんの旧友で現地デリー駐在のＮＨＫ職員太田夫妻も立ち会って下さり、チャランバドゥカの聖者もフカム・シン氏の要請で慰霊碑を監視してくれるとの事。天候に恵まれず、ずっと雨と雪ですが、10月2日私と松山さんは期せずして（多分）初の外国人サトパント湖到達となりました。

マナ周辺は観光地と化したものの、アラクナンダ河奥は相変らずの厳しい制限地区で、パスポートあずかりとなりました。花の谷は雪のため本日から入域禁止となりました。明日ジョシマートへ移動します。バドリナートも霙です。

10月5日　寺沢　玲子

Books

登山研修 Vol.12-1997

ＪＡＣ青年部Ｋ２、戸高Ｋ２、ウルタルⅡ峰、

トランゴ・ネームレスタワー、ギャジ・カン＆ラトナチュリ、メルー東北東稜などヒマラヤの高峰の報告がある。圧観は高橋堅によるウルタルⅡ峰各面のルートの概説。

尾形好雄ＨＡＪ常務理事の「高峰登山のタクティクス考察」は、プレ・サガルマータ南西壁のチョー・オユー登山を例として解説。

研修所友の会研究会報告は、山野井泰史の講演と質疑応答。その他山岳４団体による「プラブーツ突然破壊」、雪崩から身を守るためになど盛り沢山の内容である。

Ｂ５版　185頁

〒930-14　中新川郡立山町千寿ヶ原
文部省登山研修所

空へ

ジョン・クラワカー著

昨年春、世界最高峰エヴェレストでは、南北共遭難事故が多発した。本書はネパール側からサガルマータ南東稜（ノーマル・ルート）に、ニュージランドのロブ・ホールが組織したガイド付き公募登山隊に顧客として参加したアメリカはシアトルの登山家ジョン・クラワカーの手記である。

ヒマラヤの八千メートル峰にガイド付き公募隊が登場したのは、1980年のダウラギリが初めてであったが、その波がエヴェレストに波及するのにそれほど時間はかからなかった。1986年から毎年のようにエヴェレストを舞台に顧客達が夢を追った。しかし、90年代に入るとその隊が一気に増え、顧客の質もガイドの質にもバラツキが出てくるようになったのは、自然のながれであろう。

アメリカのアウトドア誌の「アウトサイド」は、このようなエヴェレストを舞台に盛況を極めているように見える「ガイド付き公募登山隊」の実態についてレポートするように著者を派遣したのである。その受入先がたまたまロブ・ホールの隊であった。この隊には、日本の難波康子さんも参加していた。そして、あの惨事が起きたのである。

著者は高峰登山の経験こそ無かったものの、登山を忘れる事のできない程、のめり込んでいた。そのような岳人から見た、この隊の顧客達の評価が随所に出てくる。そして、アプローチやＢＣから上のルートなどを描写するに際して、これらの顧客だけではなく、他隊のメンバーも含めて、エピソードを交えながら紹介している。

本書を読むと、少なくとも評者は、ガイド付き公募登山隊のある面に対して認識を改めなければならない。それは、「ガイド付き公募隊」の顧客は費用(今回の場合、カトマンズ～登山～カトマンズ＝６万５千ドル)さえ払えば自由に登山できると考えていた。束縛されないことがこの手の登山隊の特色と考えていたのであるが、本書の記述によれば、これが大きな間違いであることが分かる。

著者は登山者としての目から、高峰登山の実践的な報告を数多く盛り込んでいるし、リーダーシップやメンバーシップについても参考になることが多い。また、エヴェレストの登山史にも触れているし、シェルパ達の山への想いについても記述している。それは読者達の感想と一致するだろうか。

そして圧巻は、レポーターとして参加した著者がサウス・コルの上下で経験する壮絶な死と生の戦いの模様である。ここには小説では味わえない真実の体験があり、感動を呼ばずにはおられない。

最後のネパール孤児の話しは身につまされた。

30周年資金協力者ご芳名

10口（井上功）、８口（八嶋寛）、５口（小島守夫）、３口（市川春代）、２口（辻野健治・治子、田辺治・ともみ、飯沢実、西嶋錬太郎、涌澤亮介）、１口（中谷正秀、斉藤則子、鈴木常夫、国井治、滝口紀彦、森茂、福島功夫、木辺正夫、及川美奈子）

総計167名　3,757,000円（1997.10.24 現在）

東京集会のお知らせ

日　時　11月17日（月）午後７時～
30周年記念について

場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）
又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

バルトロ氷河から三山登頂報告

群馬県山岳連盟隊

ガッシャーブルムⅠ峰からⅡ峰へ連続登頂

品川幸彦

■八千メートルの世界へ

標高八千メートルとはどういう世界なのか。7,000m峰にはいくつか登っていたが、あと数百m登ると世界が変わるかもしれないという高さの魅力は心の中にずっとあった。そして1997年、群馬県山岳連盟カラコルム登山隊のメンバーとして8,000mの山に登るチャンスを得た。

ダブルハットトリックを目指す群馬岳連隊のA隊でガッシャーブルムⅠ峰とⅡ峰に続けて登る計画だ。ブロード・ピークとGⅠのB隊、GⅡとブロード・ピークのC隊と異なる点はA隊はベースキャンプの移動がないという事だ。それを戦略に生かして高所順応の基本であるノコギリ歯状の行動パターンの最後の頂点にGⅡを、一つ前の頂点にGⅠの頂上をあわせる事になった。つまり、ひとつの8,000m峰を登るつもりでふたつの頂上に立ってしまう考えだ。戦略担当の宮崎さんの作戦である。しかし隊員の体力はもつのか、BCでの休養は必要ないのか、天候の周期はどうなのかなど心配な点があった。

名塚隊長と星野隊員の2人がルート工作、江塚・品川がルート整備と荷上げ、宮崎・馬場・岩崎(栄)隊員の3人が荷上げを担当し、シェルパは必要ならば適時配置する基本行動が決まった。

■Ⅰ峰を目指す

C1まではすでにGⅠへ行く韓国隊が南ガッシャーブルム氷河の左岸、GⅡへ行くアメリカ隊が中央にルートを工作していたが、どちらも途中で行き詰まっている様だ。BCで2日間の休養の後、C1への行動を始めた。韓国隊のルートをとり彼らのデポ地点まで行く。韓国隊はその先まで進んでいたが、頭上を見上げるとGⅠ西稜が目前にせまりセラックが今にも落ちて来そうだ。こんな所は歩きたくないので30分ほど引き返し中央ルートをとる。アメリカ隊の中間キャンプを過ぎ右岸へぐるりとまわり込みやっとC1予定地まで到着した。全員最初の行動なので5,000mを越える高度はつらい。荷上げと順応を兼ねて3日続けてC1を往復した。

2日かけて名塚隊長と星野隊員がC2までのルート工作をしてBCまで降りるのと入れちがいに江塚・品川が荷上げに出発する。北西壁基部から中央にぬけてガッシャーブルム・ラに至るラインがC2へのルートだ。途中に標識ポールを足して視界が悪くても心配ない様にした。

C3へはイギリス隊2人といっしょになった。先頭は星野隊員、後ろに名塚隊長と江塚さん、イギリス隊が続く。C2とC3間は現在ノーマルルー

トになっているジャパニーズクロワールである。古いフィックスロープが何本も残されていた。核心部をぬけた岩の斜面にフィックスロープとその支点にスノーバーがぶらさがっていた。いつのスノーバーだろうか。その時はこの斜面はスノーバーが使えるだけの雪がついていたのだろう。少くとも岩のでている今年は使えない。やわらかい雪壁をぬけると脆い岩稜となった。後ろから登ってくる隊長に石を落さない様に気をつけながらアイゼンのツメを岩にのせる。2ピッチほどで終わり、ほっとひと休み。左へ進み3ピッチ登ると傾斜のゆるやかな雪面となった。20mほど先につぶれたテントがあった。さらに上部にテントを張るいい場所があるみたいだったが、明日にする事にしてC2へ下降した。

翌日の7月6日にC3建設となり、つぶれたテントの場所まで登り星野隊員がその上へ様子を見に行った。上のほうがいい場所だという事だが、今からプラス1時間の行動はきついので、C3はつぶれたテントのある7,100m地点に決めてテントを張り明日のアタックに備えた。

7月7日アタックの日。午前3時半出発。頂上への雪面は見た目より傾斜がきつくスピードがでない。それでも風はなく、天気はよくて登頂できる自信はあった。頂上直下でロープをフィックスした頃には気温も上がりダウンジャケットをぬいでフリースで行動できた。そのまま頂上に立ち写真撮影のためにジャケットを着てちょうどよいほどのあたたかさだった。時刻は14時半近くになっていた。登頂の交信をして祝福の声を聞きながら八千メートルの景色を楽しんだ。登頂した喜びよりも次に登るGⅡやB隊の登っているブロード・ピーク、その向こうのK2などに夢中になっていた。

4人でスタカットで下降したのでC3に着いたのは20時近くになり、あたりはすでに暗くなってしまっていた。午前3時半から午後8時まで行動した長い一日であったが、テントに入りお茶を飲みスープも飲みぞうすいを食べる食欲もあった。

翌8日は二次アタック隊の宮崎さんとシェルパがC3に入った。前後してイギリス隊、韓国隊など数隊がどっとC3に登って来た。群馬隊がルートを作り登頂するのを待っていたかのようだ。この日も天気は良好でC隊の後藤副隊長と尾形さんがGⅡに登頂した。昨日とは反対に登頂したC隊におめでとうと伝えてからC1へ向かった。

■連続登頂を目指してⅡ峰へ

C1で休養の後、GⅡへ向かう。すでにC隊によってルートもできている。天気さえ良ければ登れる。もちろん目標は全員登頂だ。順応の遅れていた馬場、岩崎(栄)隊員やC隊の綿貫、田島にもがんばってもらいたい。C2、C3と順調に登り14日にアタック。酸素を使用している宮崎さんはぐんぐん先に進んでいく。馬場さんも酸素を使っていたがレギュレーターの調子が悪いらしく我々と前後して登っている。雪壁を登りきると左へ続くナイフリッジ。その終わりはGⅡの頂上だった。アタックした全員が登頂し自分もふたつ目の8,000m峰の頂上に立った。7日前に登ったGⅠが美しく見えていた。

■テイクアウトしてBCを去る

B隊がGⅠへの登山を中止した事により群馬岳連の登山活動は終わった。帰りのキャラバンの梱包作業にとりかかる。登山活動が長くなれば必要となるはずだった食料が大量に残った。少人数の遠征隊分ほどの量だ。キャラバンに使わないものは焼却する事にした。

BCを去る日、まだ燃えきらない食料を岩崎(洋)隊員が、かきまぜていた。すでにポーターは出発し隊員も準備のできた者から歩き始めている。なかなか燃えきらないので最後に残った5人でつついたり、かきまぜたりしてみる。明日はゴンドゴロ峠を越えなければならないのでゆっくりしているわけにはいかない。チョゴリザの向こう側には雲が来ていた。10時頃やっと燃やし終わりBCを後にする。もうすでにポーター達の姿は見えなくなっていた。ふりかえるとモレーンに沿ってあった大テント村は消え去り、2つ3つポツンとテントがあるだけになってしまった。自分の初の八千メートル峰となったGⅠにも少し雲がかかり始めていた。

先生も登った
ガッシャーブルムⅡ峰

田島崇行

■雲の上の先輩たち

1997年7月14日、無風快晴の中、最後の雪壁を登りきり、左へちょうど1ピッチのナイフリッジを高まる気持ちを抑えながら、軽くなった足を一歩一歩前へ出して行く。名塚隊長の背中を追い掛けながら……。

この遠征のことを初めて聞いたのはたしか、95年の4月頃だったと思う。名塚隊長からの誘いだった。そのころ私は高校を卒業して、車の免許も取り毎週のように棒名山の黒岩というゲレンデに通っていた。そこで名塚隊長から誘われた。そして、今回の隊員の星野さんからも。

名塚さん、星野さんは私にとってまさに雲の上の人、憧れの人だった。この大先輩に初めて会ったのは私が高校生の時。群馬の高体連登山部で春休みに、雪の中の尾根で行われる講習会だった。そこに講師として名塚さん、星野さんが来てくれていた。とくに星野さんは、私が一年の時に私たちのパーティに入ってくれて雪山の基本をよく教えてくれた。そして帰りにいっしょに記念写真を撮ってもらった。それから2年後にはいっしょに山を登っていた。

■保育園の柳沢先生

私が登山を始めたのは高校の時。山岳部に入ってからだった。中学のころから山に登りたいと思うようになったが、もしかしたらもっと前に私の頭の中に登山というものを洗脳したひとがいたのかもしれない。いたとすればその人は、私が保育園に通っていた時の保母さん、柳沢伸子さんだと思う。

柳沢先生は今回の隊員の吉田文江さんたちといっしょに、今回私が登る山、ガッシャーブルムⅡ峰に1988年女子登攀クラブの隊員として参加し、登頂している人だった。

今でも幼心に、先生が山に登っていたことを覚えている。そして今、私に山登りを洗脳した人？が登った山、ガッシャーブルムⅡ峰に登ろうとしている。何という偶然だろう。

そんなことがあって高校では山岳部に入った。そして岩登りや雪山が登りたくて、高校2年の時に、群馬登高会に入会した。それから本格的に登山するようになった。

そして、高校を卒業し、名塚さんや星野さんから遠征に誘われてからは、会社に勤めていたので多少、お金の自由がきくようになり、今まで以上に真剣に登山をするようになった。

それから2年が過ぎ、登山隊の隊荷の梱包、そして輸送も終り、5月17日、日本を出発する。

パキスタンの山に行くのにまず初めに行ったのはネパール。ネパールには行きたかったので、ラッキーだった。

■先発としてネパールへ

ネパール先発として行った人は、私たちよりも先にネパールに入っていた野沢井さん。そして、星野さん、深瀬さん、田島の4人だった。

何をするためにネパールに行ったかというと、今まで群馬岳連がカトマンズにデポしていた装備、特にテントや登攀具、そして連絡官に支給する装備などの買い出し、パキスタンに送ることだった。

ネパールでの仕事は無事終ったが、自分のカラダは無事ではなかった。初めての海外、しかもネパールである。お決まりの(？)ゲリである。ネパールに来て4日目、特大ステーキをおなかいっぱい食べてしまった。たぶんそのせいでゲリになったのだと思う。ゲリはパキスタンに行ってもなかな

か治らず、登山をする前からとてもつらかった。

5月24日、カトマンズを出る。そしてバンコク経由でパキスタンへ。

そして次の日の25日の夜中と言うか、朝というかわからないが、3：25くらいにバンコク空港を出発して、7：30にパキスタンのイスラマバード空港についた。そして今回宿泊するラワルピンディーのフラッシュマンズホテルへ。

■バルトロ氷河へ

今日はゆっくりできると思ったら、やっぱりあまくはなかった。ホテルについてすぐに灼熱の町へ買い物に行かされた。行き場所は、ラジャバザール。すごい人の数だった。

ラワルピンディーでは朝早く起きて作業、そして昼は休んで、また夕方作業をする。

5月30日、夜、本隊到着

6月2日、朝、トラック2台に隊荷をつめ込む。トラックは先にスカルドへ。

6月3日、スカルド先発出発。そして6月5日後発が出発、私は後発。車はスカルドを目指してカラコルムハイウェーを快適にとばして行く。途中チラスで1泊し、2日目は登山より怖い道だった。ガードレールも無い、落ちればインダス河へまっ逆さま。そんな怖い時は寝て過すのが一番。そして、目がさめた時は、穏やかな河原の横を走っていた。もうすぐスカルド。

スカルドではK2モーテルに泊った。

スカルドでは最終の食料や装備の買い出し、ナンバリングをして、6月8日、キャラバンを開始した。

最初はジープ。ガタガタ道を走り、途中つり橋が流されていて、ロープでジープを引張り、アスコーレまで。今日もガタガタ道の中、車の中で寝てしまった。私はどこででも寝れるのだ。他の隊員から「田島は寝てばっかりだ」と登山中ずっと言われてしまった。本当によくいろいろな所で寝ていた。

キャラバンは順調に進み、パイユで高所順応のため、裏山に登りに行った。ウルドカスでは、ボルダリングもやった。ウルドカスからはトランゴタワーがよく見えた。とても登りたかった。

ウルドカスを出るとすぐにブロード・ピークが見えた。やっぱり八千メートル峰は大きい。

コンコルディアでは順応のためにブロードBCへ。ブロードBCへ行ってコンコルディアに帰ってくると頭が痛かった。そのころから高度障害が出はじめた。

そして、ガッシャーブルムBCに入る時はもうフラフラ、歩くのがつらかった。おかげで登山開始が他の隊員より1日遅くなってしまった。

■いよいよC2へ

6月19日ガッシャーブルムBC着。モレーンの上にベースキャンプを建設し、22日から他の隊員はC1へ向けて行動を開始した。

翌日、23日、私は行動を開始した。歩き始めた頃はカラダの調子は良いと思ったが、だんだん歩いて行くとやっぱり高度になれていないカラダにはきつく、20mくらい歩いては休むというかんじだった。そんなことで結局C1にはつかなかった。下りはもっと最悪だった。もうフラフラやっとのことでBCについた。

翌日は無事C1往復。もう1回C1を往復し、27日にC1入り。やっぱり頭が痛い。バファリンを飲んで早く寝た。C1は氷河の上でとても熱い。

28日は雪の降る中、C2往復、C2へのルートは取付きから氷。フィクスロープにユマールをセットしてゆっくり登る。2P目からは雪壁になった。雪壁を数ピッチ登るとリッジに出る。あとはリッジ。C2の手前で20mくらい下り、ナイフリッジを2P登り、雪壁を登るとC2。C2はとても広く安定した雪稜の上。まだテントは張っていないので、すぐに下りた。

C1につきゆっくりしていたら頭が痛くなってきた。翌朝起きてびっくり。顔がパンパン。寺田さんに、「まるでアンパンマンだ」と言われてしまった。頭痛も治らず、食欲もなく、つらい一日だった。外はずっと雪がふっていた。今日は停滞。

翌日は、BCへ下山。私の場合は、高度障害をなおすため。他の隊員は雪のため下山。もし雪が降りつづかなければ1人でBCへ下りなければならなかったので、A隊、C隊の両隊の隊員全員で下山できたのは私にとってはよかった。やっぱり

１人で雪の中、氷河の上を歩いて下山するのは怖かったから。

ＢＣへ下りたら今までのつらさがうそのようになおり、食欲も出てきた。顔ももとに戻った。

１日ＢＣで休養をとり、７月２日再びＣ１へ上がる。まだカラダがつらい。

翌日、Ｃ２往復。尾形さん、後藤さんがラッセルをしながら、雪に埋まったロープを掘り出しながら登って行く。私はまだ6,000ｍ以上の高所になれていないので、ラッセルをしている２人においつけない。それに尾形さん、後藤さんは強すぎる。そんなかんじで登って行き、Ｃ２のすこし手前のナイフリッジの手前に荷上げしてきたロープなどをデポをして今日はＣ１へ下りた。

７月４日、Ｃ２建設。だんだんＣ２の高度にもなれてきた。今日は外国隊の人がいっぱい登ってきた。天気もいいし、トレースもついたし。Ｃ１への下りは登ってくる人とすれちがうので、けっこう大変。

■初めての八千メートルの頂（最年少登頂）

翌日はレスト。Ｃ１のテントをすこし動かして整地した。これでＣ１では快適にねれる。

６日はＣ２往復。７日Ｃ２へ移動。そしてＡ隊が、ガッシャーブルムＩ峰に４名登頂。登頂する頃無線を聞きながらＧＩの方をずっと見ていたが、肉眼では何も見えなかった。

翌、８日、後藤隊長、尾形さん、シェルパのナワン・ドルジェがガッシャーブルムⅡ峰に登頂。

その頃私は、Ｃ３へ順応のために登っていた。私も早く頂上に立ちたいと思いながら。でも7,000ｍを越えるとつらい。思うように歩けなかった。今日はＣ２へ下りて、翌日Ｃ３へ移動。

Ｃ３へは30Ｐ。とても長かった。7,000ｍくらいまではけっこう急な雪壁。そしてゆるやかな雪稜、その上はミックスの岩稜、そしてＣ３。

Ｃ３は、過去の隊が残していったテントがいっぱいあった。

７月10日１回目のアタック。寺田さん、綿貫さん、シェルパのノルブと私の４人で。暗いうちは天気が良かったが明るくなってから、吹雪になった。そのため7,800ｍ付近でアタック中止。下山

東京新聞の本

山の情報誌 岳人

GAKUJIN
岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。
直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。
郵送料は通常号116円、特大号124円です。
年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。
お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第１特集	特別企画
★１月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
２月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★３月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
４月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★５月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★６月号	私の花の名山	創刊50年　世界のアルピニストたち
★７月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
８月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
９月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

中目が見えにくくなった。今日はそのまま一気にＣ１へ下山した。

次の日は休養をして、12日にＡ隊といっしょにアタックのために上へ移動。12日にＣ２、13日にＣ３へ。アタック失敗後の登り直しはつらかった。

７月14日、Ａ隊といっしょに２回目のアタック。遠くの方では雷が光っていた。３時30分出発。２回目のＣ３から頂上への道は気分的に楽だった。Ｃ３から右上して６時にコルに着いた。１回目はここまで。コルから見る頂上はけっこう近くに見えた。コルから雪壁をゆっくり、確実に登り、フィックスロープに助けられながら、雪壁を登りきる。頂上まではあとナイフリッジを１Ｐ。もう頂上には数人いた。名塚隊長の背中を必死に追いかけながら歩く。息のくるしさもあまり感じない。そして頂上まであと数メートルの所で、おさえきれず涙が出てしまった。８時20分、ガッシャーブルムⅡ峰の頂上に立った。頂上ではおもいっきり泣いてしまった。

頂上には１時間ちょっといた。写真をとり、ビデオを回し、石をひろいあっという間にすぎてしまった。やっぱりＫ２は大きかった……。

ここまでつれて来てくれた先輩たちに心から感謝した。そして今回の登山ですこしは高所に対する自信がついた。今日の経験を、今後の登山に生かし行きたいと思う。

今後は6,000ｍくらいの山でおもしろそうなルートや、ビックウォールを登ってみたいと思っている。

ＨＡＪ30周年記念行事資金協力のお願い

ＨＡＪは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定でありますが、会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

１．お願いする金額：一口　１万円

＊機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します。（匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。）

２．記念行事の概要：

１）式典関係：

式典：1998年１月25日（日）（300名程度を予定）

午前：右記のとおり

午後：ネパール、インド、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

２）出版関係：

1.ＨＡＪ30年間の行動記録：　500部

2.ヒマラヤ日本隊のまとめ：　500部

3.ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部

4.機関誌「ヒマラヤ」総索引：　200部

３）野外関係：

それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。

４）写真展：

会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

日本ヒマラヤ協会創立30周年記念行事案内

1998年1月25日（日）

Ⅰ．式典・講演の部

1）場所：科学技術館・サイエンスホール

2）日程：

9:00　開場

9:10　主催者挨拶（会長　遠藤登）
招待者紹介、感謝状贈呈

9:30　30年間のあゆみ（理事長　稲田定重）

10:40　記念講演：ヒマラヤの三大峰を語る
〔名塚秀二〕　厳冬のサガルマータ南西壁、チョゴリ北西壁、カンチェンジュンガ北東支稜を登り、ヒマラヤの東から西までの巨峰について、現在日本では最も多くの八千メートル峰登頂の記録（6座7回）を持ち、群馬県山岳連盟海外研究会委員長、ＨＡＪ理事として活躍中の氏が、ヒマラヤの美しさと厳しさ、そして楽しさを語る。

正午　昼食

13:00　講演「ヒマラヤ諸国の登山の現状と問題点」
中国、インド、ネパールの登山関係者が、それぞれの国の登山の現状と問題点について講演する。

17:30　閉会

3）会費：無料（公開ですので会員外の方も可）

4）申し込み：電話・ＦＡＸ・ハガキなどで、住所、氏名、年令、性別を明記して
〒170　東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
日本ヒマラヤ協会
※申し込み者は、すべて出席できます。当日、直接会場へお越し下さい。

Ⅱ．祝賀会の部

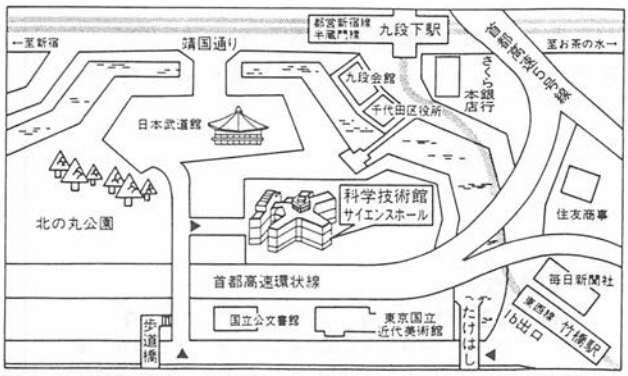
1）場所：九段会館　千代田区九段南1-6-5

2）日程：18:00〔開宴〕
主催者挨拶、内外関係者祝辞
20:00〔閉会〕

3）会費：13,000円〔会費の中には「日本ヒマラヤ協会創立30周年記念誌(約300頁)代」が含まれております。記念誌は当日お渡し致します〕

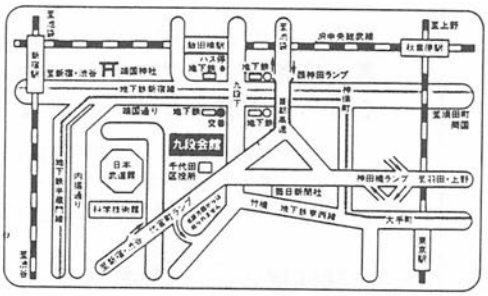
4）申し込み：住所、氏名を記入の上「祝賀会」と明記して郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」宛、会費を納入して下さい。〆切1月10日まで。

・科学技術館、サイエンスホール



（地下鉄東西線・竹橋下車1b出口　徒歩7分　北の丸公園内　日本武道館手前）

・九段会館



交通ごあんない

●JR東京駅から（車）約5分●JR上野駅から（車）約13分
●JR飯田橋駅から徒歩約10分
●地下鉄東西線・新宿線・半蔵門線九段下駅から徒歩1分

■ 寸 感 ■

・ハラーの「チベットの七年」が映画化されると聞いた時には、北インドから西チベットの脱出路がどのような所なのか興味津々であった。よく考えてみれば、スチール写真でさえ困難な中印国境で撮映機が廻わせる筈がないのは簡単に分かるのだが。ハラーのナチス問題や、中国のチベット入りに対する見解の相違など、映画の上映そのものにまつわるやっかいな問題が各国で持ち上がっているようだ。

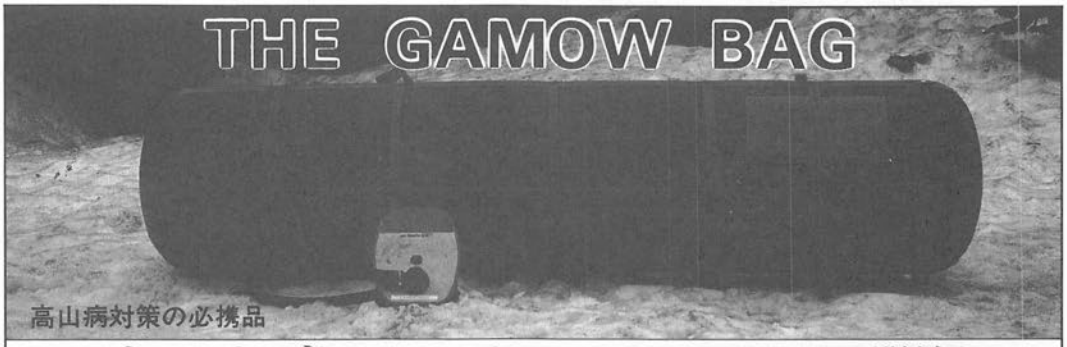
・ジョン・クラワカーの「空へ」は、ガイド付き公募登山隊の実態をレポートしている点では、最近の登山の本の中では大変参考になる一冊であった。同書はそれだけではなく、サウス・コルでの出来事から、高所で「命を賭けて救助するか」との問いに決定的な回答をしている。必読書。(山)

事務局日誌（10月）

7日（火）　大森薫雄出版記念会（池袋、山森）
11日（土）　ヒマラヤ312号発送
13日（月）　ＣＭＡへ30周年の件ＦＡＸ
17日（金）　国際山岳博物館関係団体連絡協議会（於、ＪＡＣ、山森）
20日（月）　ニンチン・カンサ登山許可受領
22日（水）　ニンチン・カンサ98年希望者へ督促
27日（月）　東京集会（21名）
28日（火）　国際山岳博物館協議会(ＪＡＣ、山森)
29日（水）　労山を知る会（日本青年館、山森）

ヒマラヤ No.313（12月号）

平成９年11月10日印刷　　９年12月１日発行
発 行 人　稲 田 定 重
編 集 人　山 森 欣 一
発 行 所　日本ヒマラヤ協会
〒170　東京都豊島区東池袋４－２－７
　　萬栄ビル501号
　　電 話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約２０００m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型)

総代理店 ： 日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先 ： 株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場２-５-７　ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号

個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク
キャラバンデスク TEL03-3237-8384
～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP
ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601㈹
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547㈹
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301㈹
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
- 新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004